

Nobel Prize in Physics 2011



Photo: Roy Kaltschmidt.
Courtesy: Lawrence
Berkeley National
Laboratory

**Saul
Perlmutter**



Photo: Belinda Pratten,
Australian National
University

**Brian P.
Schmidt**



Photo: Homewood
Photography

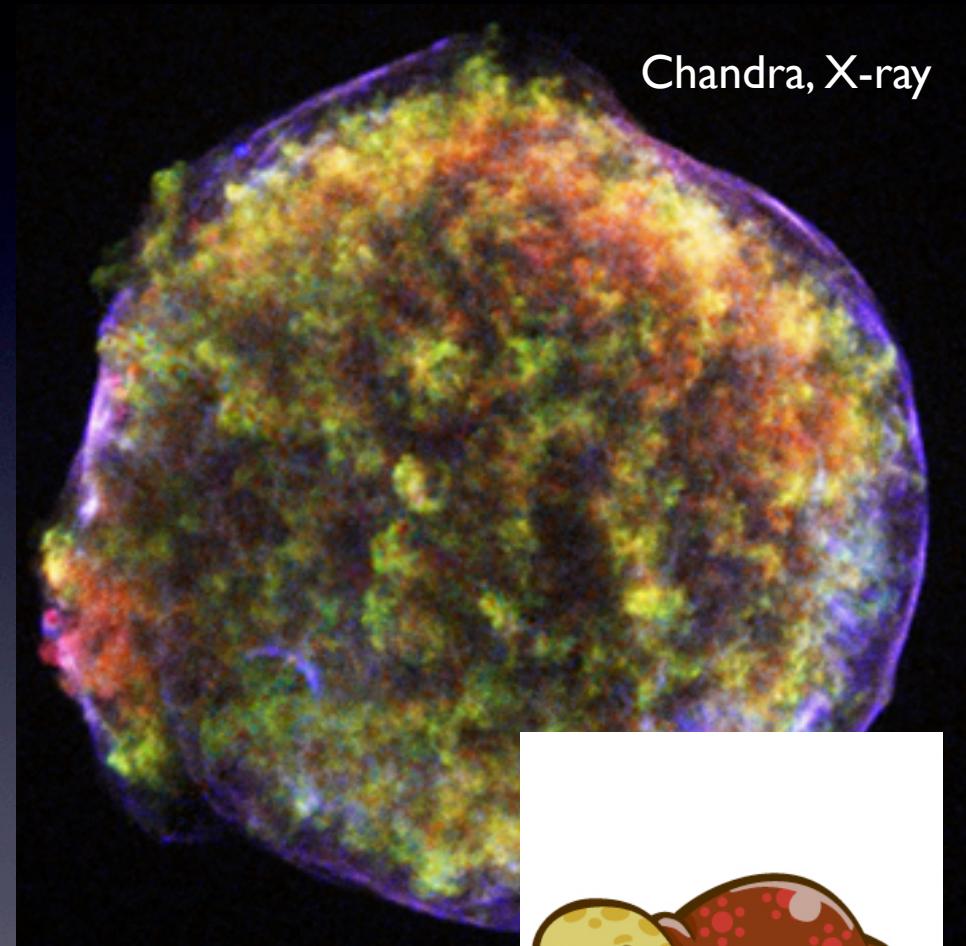
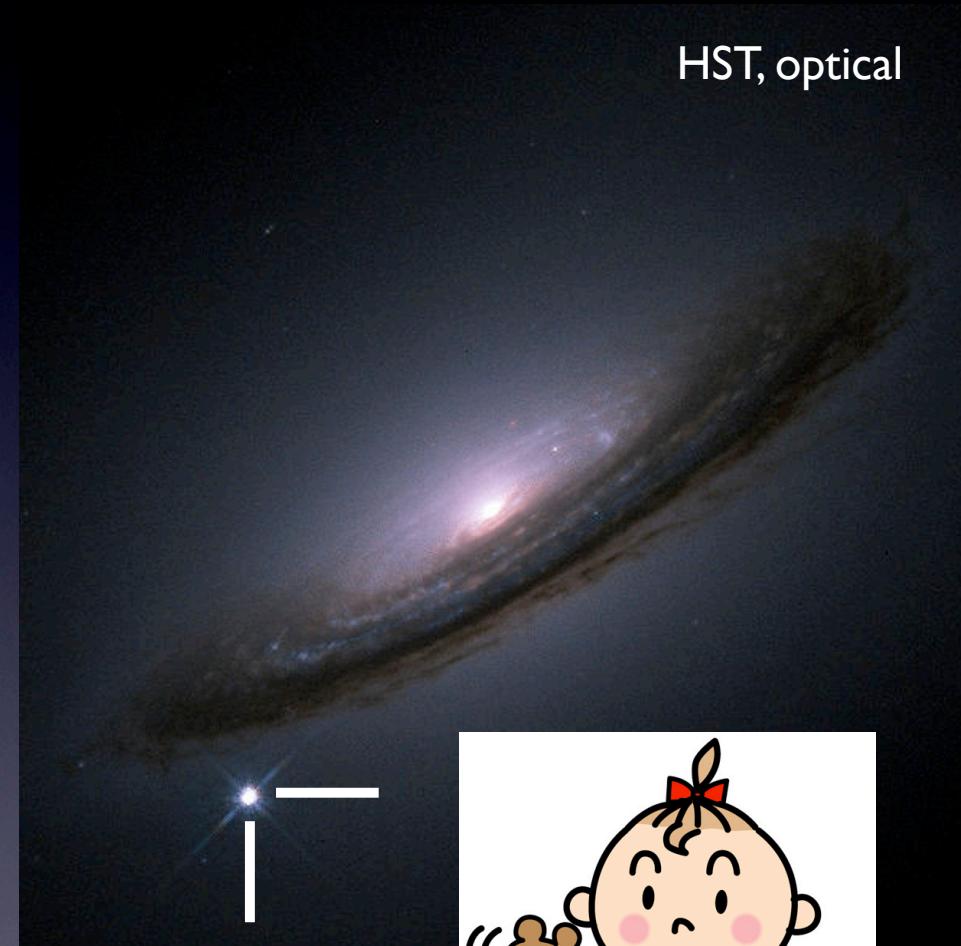
**Adam G.
Riess**

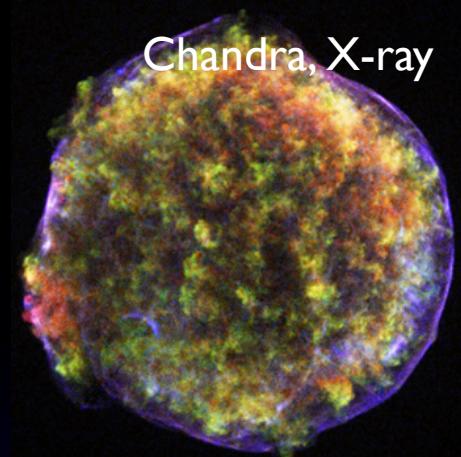
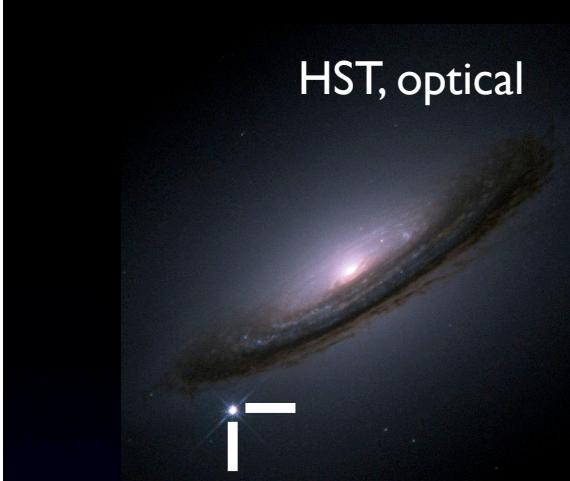
The Nobel Prize in Physics 2011 was divided, one half awarded to Saul Perlmutter, the other half jointly to Brian P. Schmidt and Adam G. Riess *"for the discovery of the accelerating expansion of the Universe through observations of distant supernovae"*.

Ia型超新星、
宇宙の距離指標、
宇宙の加速度的膨張

国立天文台
田中雅臣さん作成協力

Ia型超新星



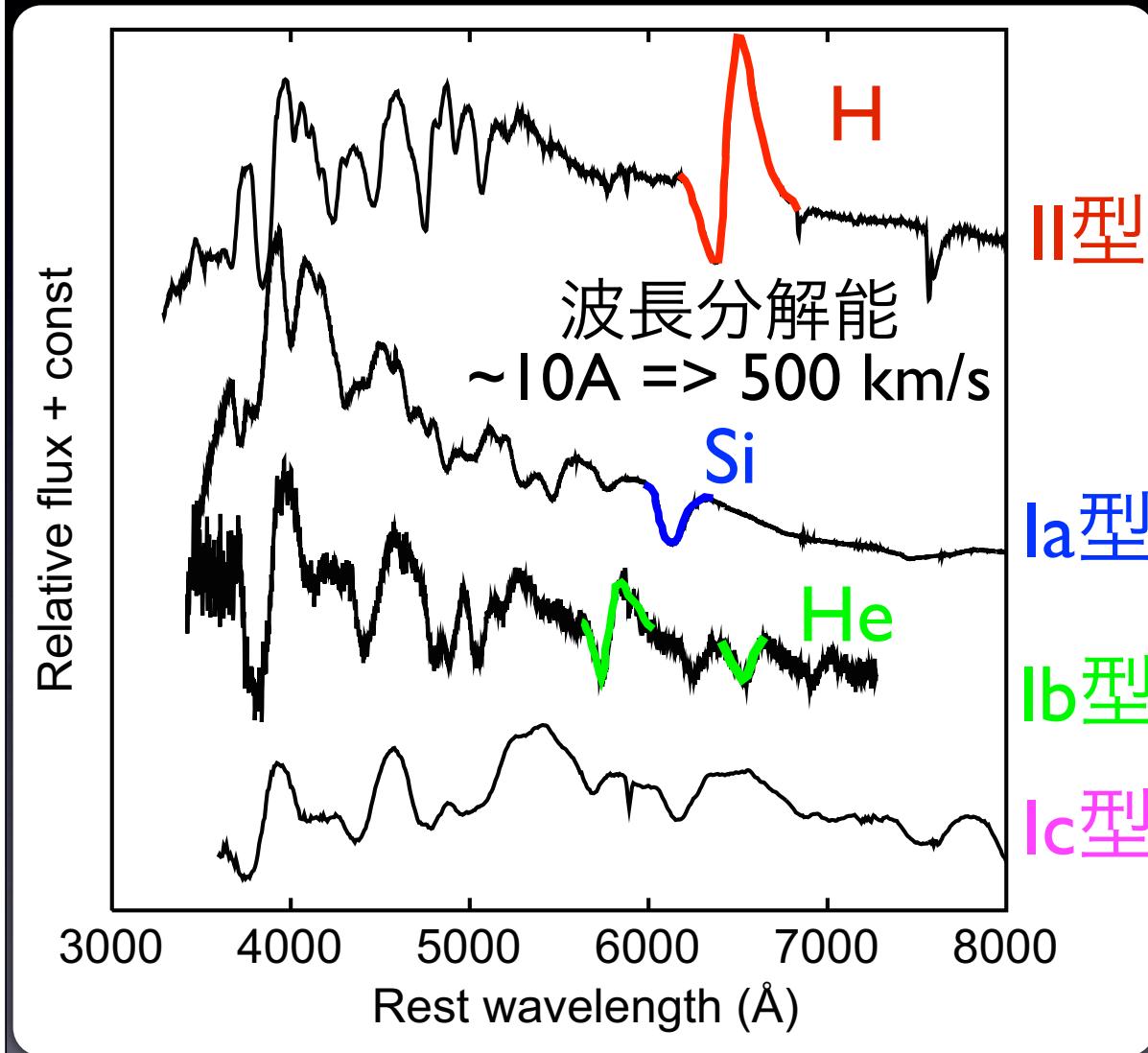


超新星残骸

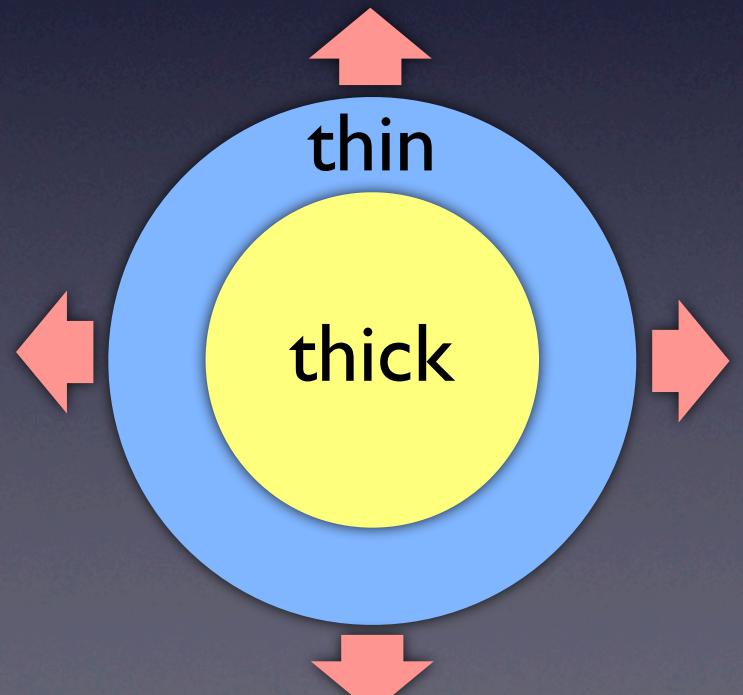
- 銀河系外（点源）
 - 年間300-500天体
 - $R \sim 10^{15} \text{ cm}$, $v \sim 10,000 \text{ km/s}$
 - 熱源は放射性元素
 - 主に可視光で明るい
 - $L_{\text{opt}} \sim 10^{43} \text{ erg/s}$
 - 吸収線スペクトル
=> 輝線スペクトル
- 主に銀河系内
 - 銀河系内に~200天体
 - $R > \sim \text{pc}$, $v \sim 3,000 \text{ km/s}$
 - 熱源は衝撃波
 - X線、電波で明るい
 - $L_x \sim 10^{37} \text{ erg/s}$
 - 輝線スペクトル
(超新星+星間空間)

そもそも「Ia型」とは

- 可視光スペクトル



- 銀河系外の超新星
- 爆発後20日程度
- $v \sim 10,000 \text{ km/s}$



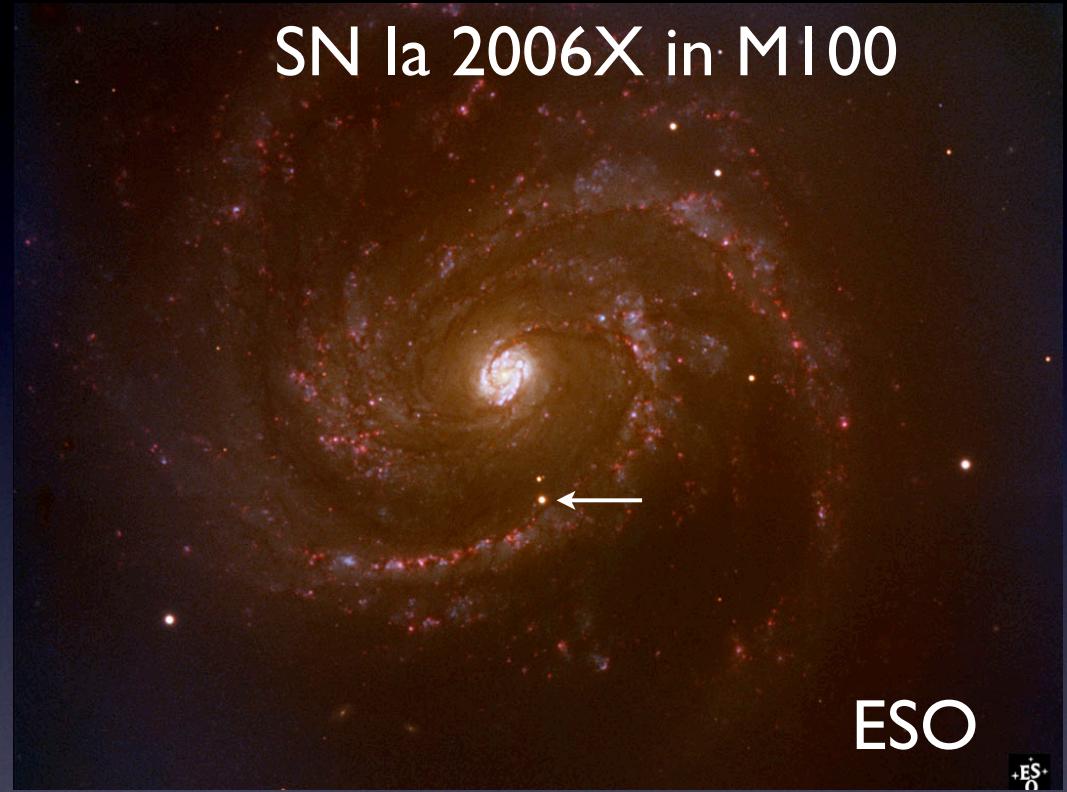
Ia型超新星の正体

SN Ia 2006dd & 2006mr
in NGC 1316



Ia型

SN Ia 2006X in M100



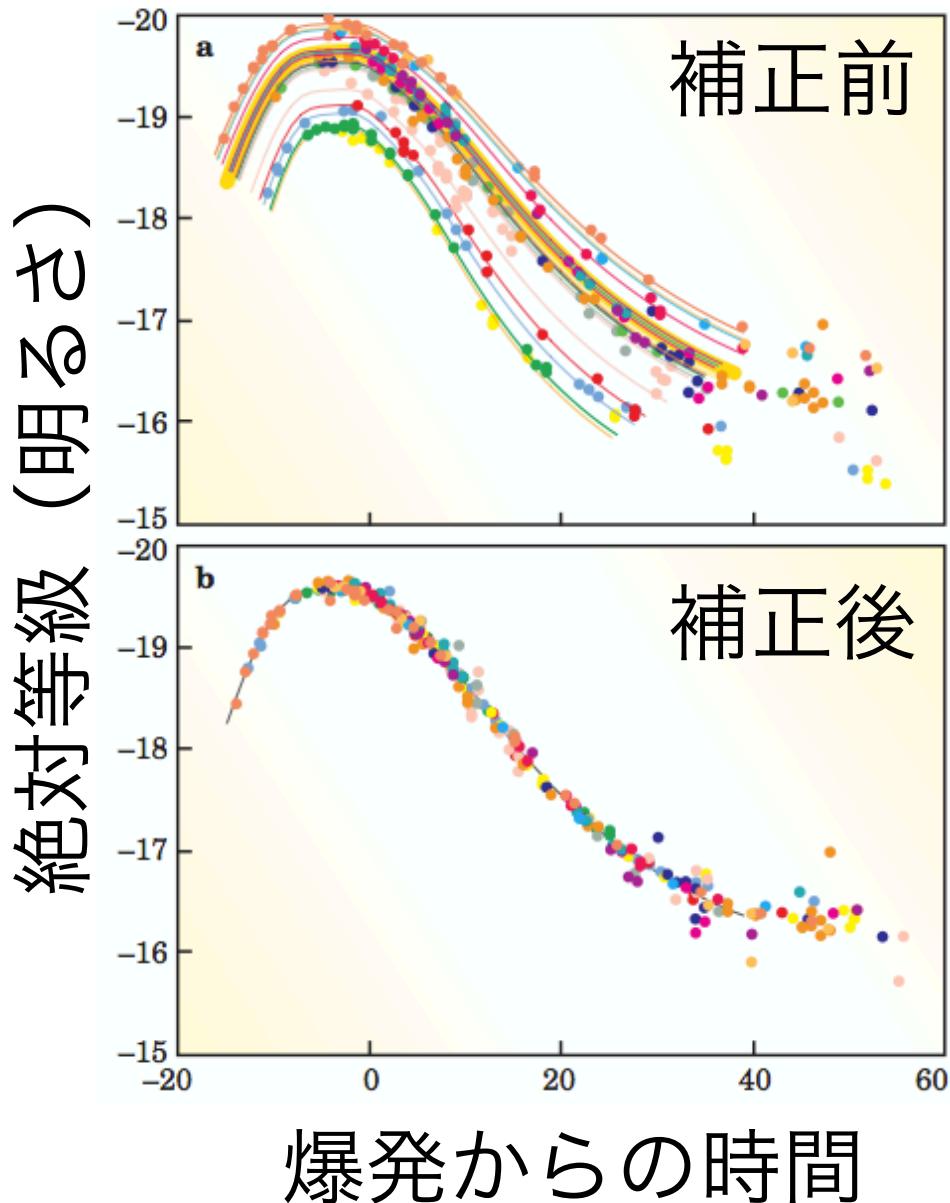
Ia型

Ib, Ic, II型

「古い」 星が起源

(Ib, Ic, II型は大質量星の重力崩壊)

Ia型超新星

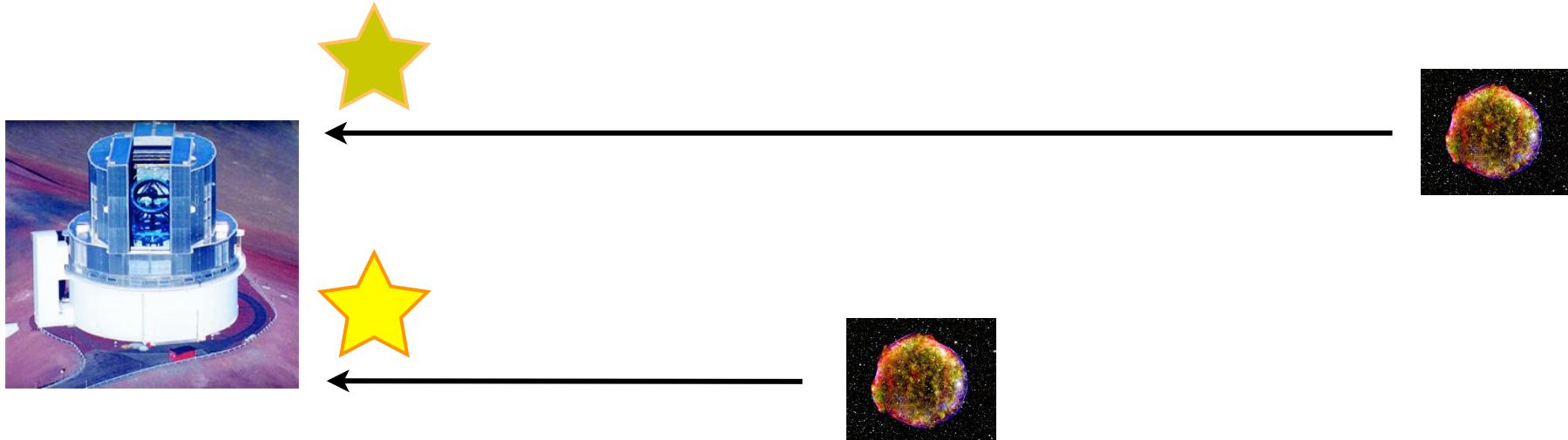


驚異的な性質を持つ

超新星の明るさの変動と
最大光度との間に
簡単な関係がある。

宇宙のどこにあっても
同じ明るさの天体として
使うことができる

見かけの明るさと距離

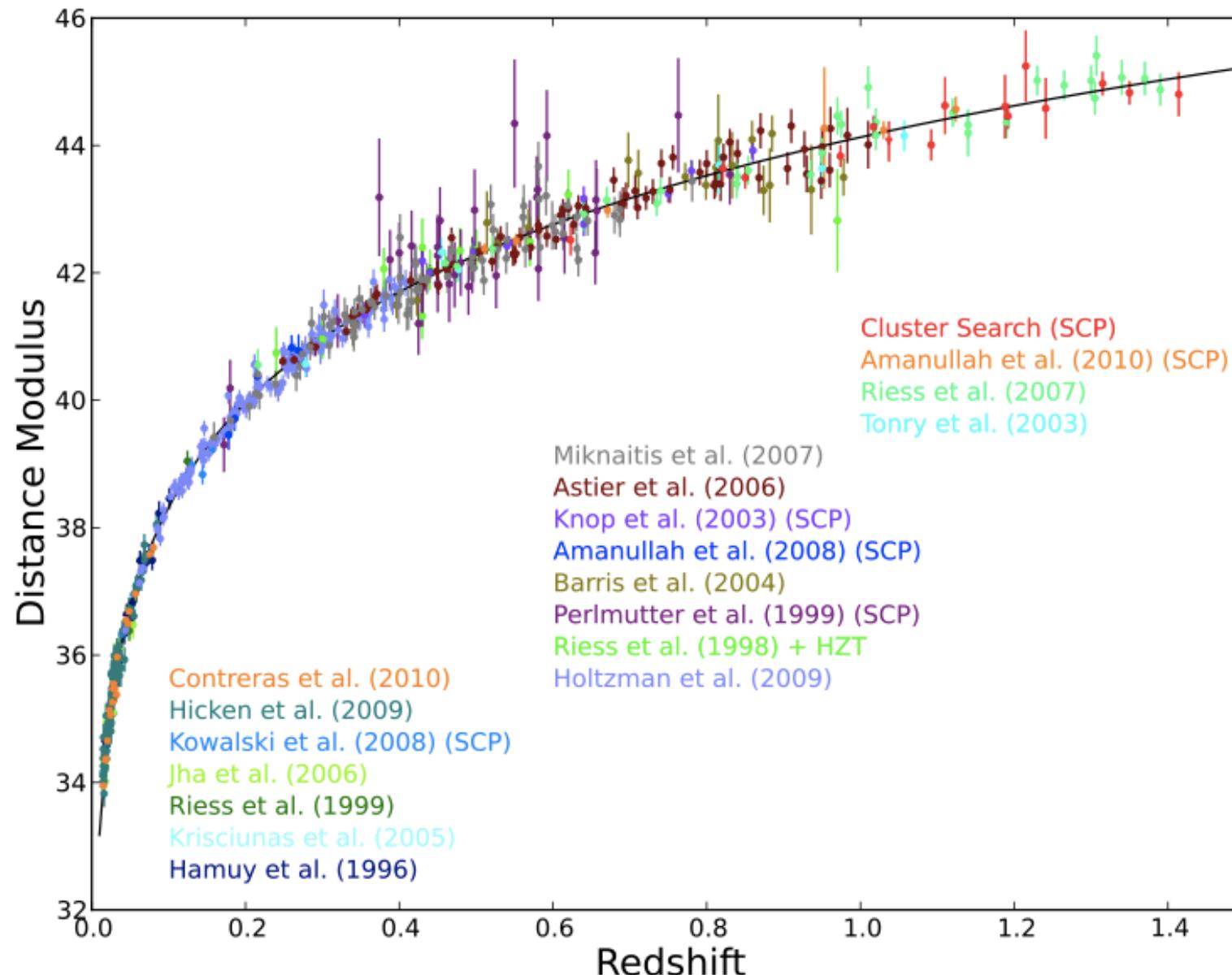


同じ明るさのものが2倍遠い場所にあると、
明るさは4分の1に「見える」



見かけの明るさを使って超新星までの距離を
「測る」ことができる

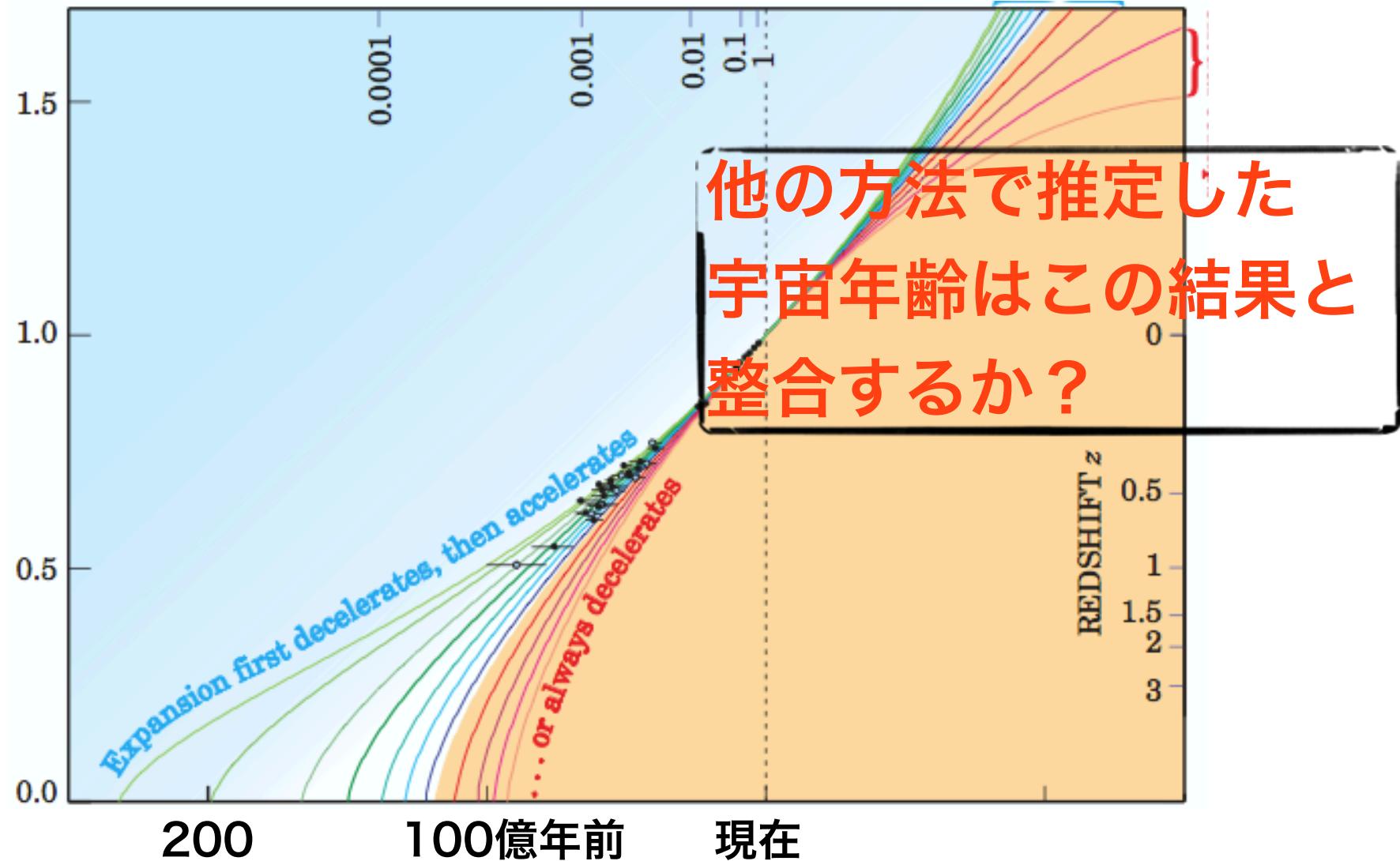
赤方偏移-距離関係式



宇宙の膨張史

超新星の明るさ

現在の宇宙を1とした場合の大きさ



現在の宇宙は 暗黒エネルギーに 満たされている！

が、理論モデルは皆無。（つまり正体不明）

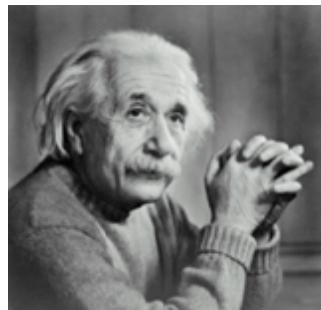
- ・何故今頃(~100億年) 重要になってくるのか。
- ・なぜ中途半端な量なのか。
- ・宇宙はこれから一体どうなるのか。

アインシュタイン方程式

$$R_{\mu\nu} - \frac{1}{2}g_{\mu\nu}R + g_{\mu\nu}\Lambda = \frac{8\pi G}{c^4}T_{\mu\nu}$$



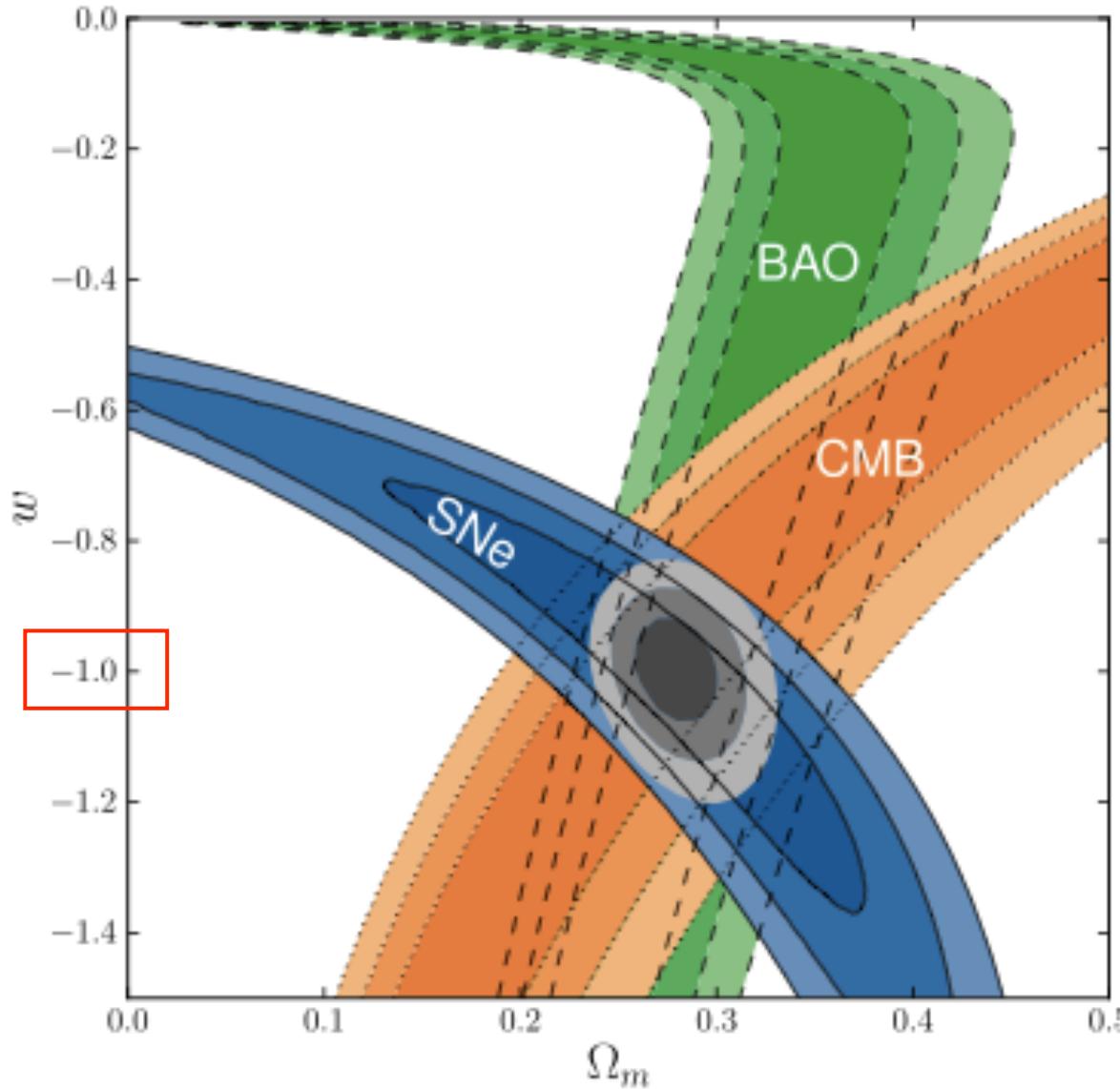
アインシュタインの
宇宙項



“The biggest blunder in my life.”

この項が大きな値をもつと、宇宙
の膨張はやがて指数関数的になる

本当に宇宙「定数」か



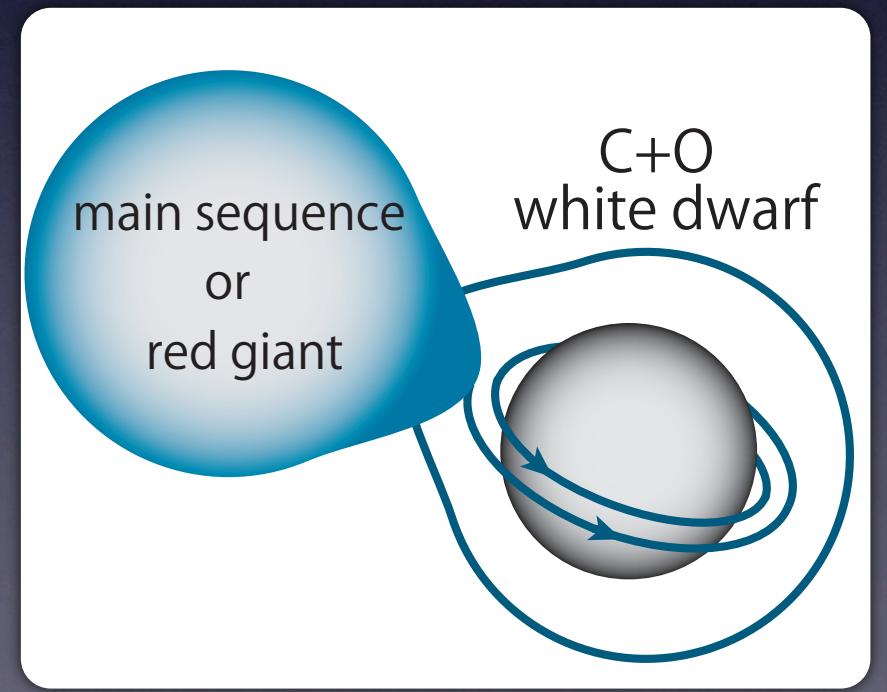
BAO : 銀河の大域的分布から得る幾何学的情報

CMB : 物質密度、宇宙の平坦性

SNe : 近傍宇宙の距離-赤方偏移関係

爆発する「古い」星

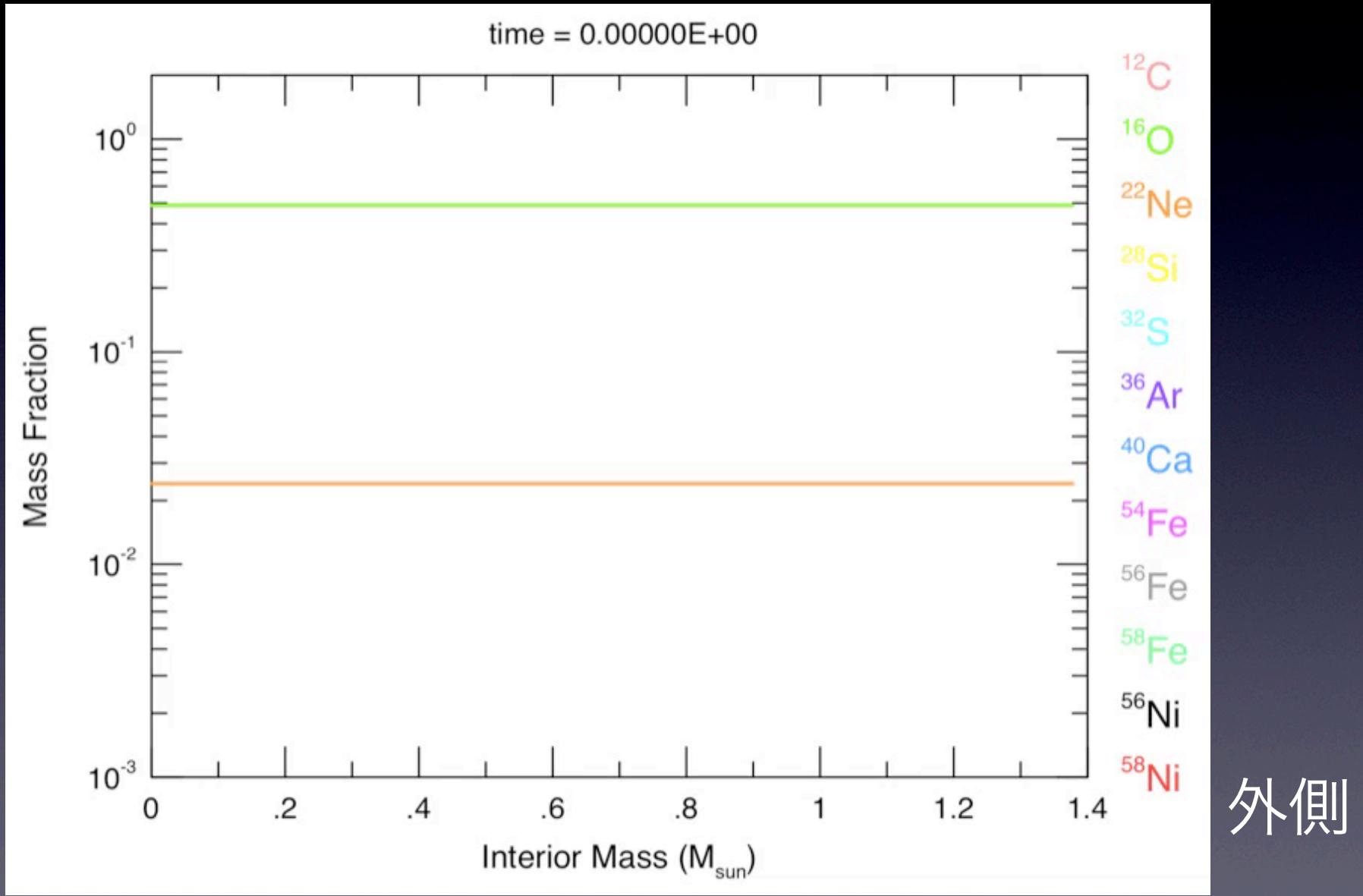
- 白色矮星の核爆発
 - C+O縮退コア
=> チャンドラセカール限界 => 核爆発
- 中性子星merger
 - ガンマ線バースト (たぶん)



白色矮星 (板書)

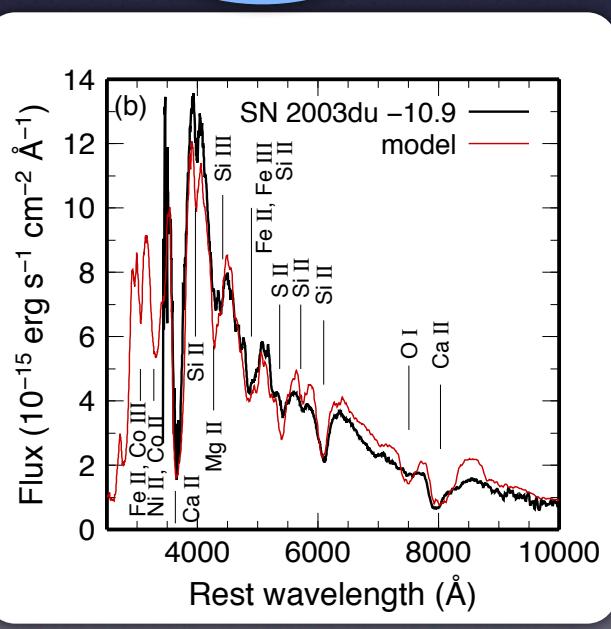
C+O白色矮星の爆発

元素の質量割合
内側

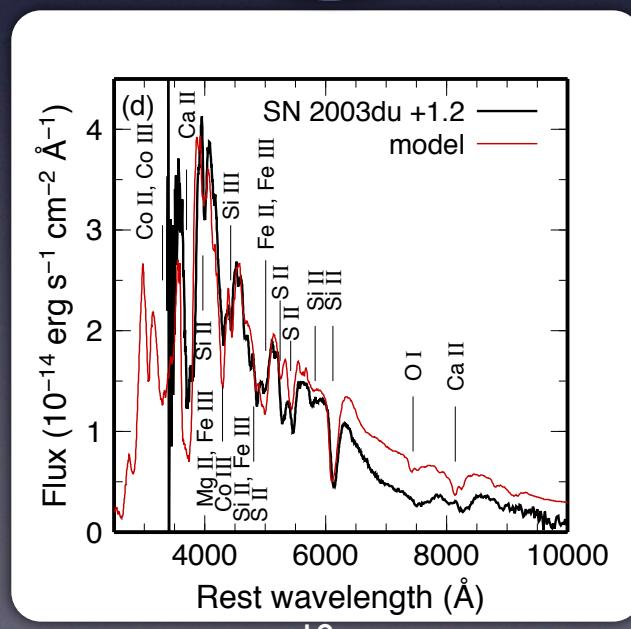


超新星の内部構造を探る

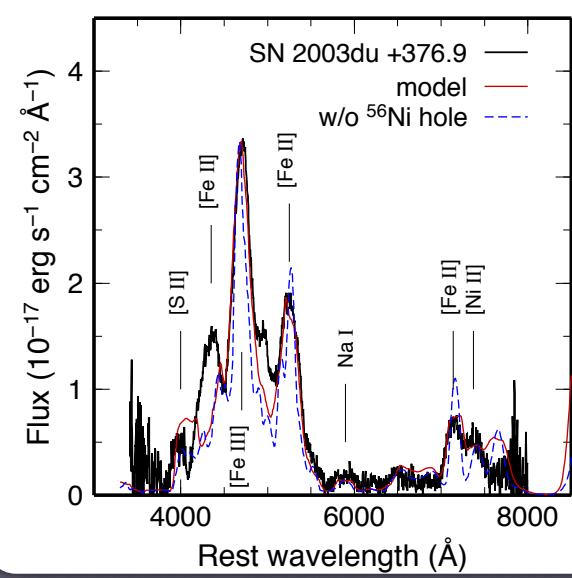
爆発数日後
~ 10 AU



爆発20日後
~ 100 AU



爆発1年後
~ 1000 AU ~ 0.01 pc

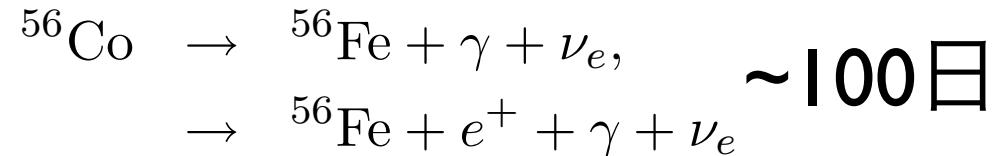
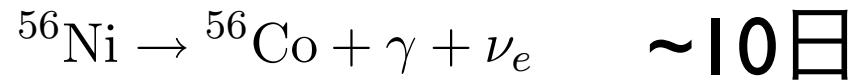


ちょっと算数

- 核反応によるエネルギー生成
 - $E(\text{nuclear}) = [1.56M(^{56}\text{Ni}) + 1.74M(\text{Fe}) + 1.24M(\text{Si})] \times 10^{51}$
 $\sim (1.56 \times 0.6 + 1.74 \times 0.3 + 1.24 \times 0.3) \times 10^{51}$
 $\sim 1.8 \times 10^{51} \text{ erg}$
- 運動エネルギー = 核反応 - 重力束縛
 - $E(\text{kinetic}) = E(\text{nuclear}) - E(\text{binding energy of WD})$
 $\sim 1.8 \times 10^{51} - 0.5 \times 10^{51} \sim 1.3 \times 10^{51} \text{ erg}$
- 膨張速度
 - $v \sim [2E(\text{kinetic})/M]^{0.5} \sim (2 \times 1.3 \times 10^{51} / 1.4 \times 2 \times 10^{33})^{0.5}$
 $\sim 10^9 \text{ cm/s} \sim 10,000 \text{ km/s}$

“Standard Candle”

- 放射性元素 ^{56}Ni ($\sim 0.6 \text{ Msun}$)



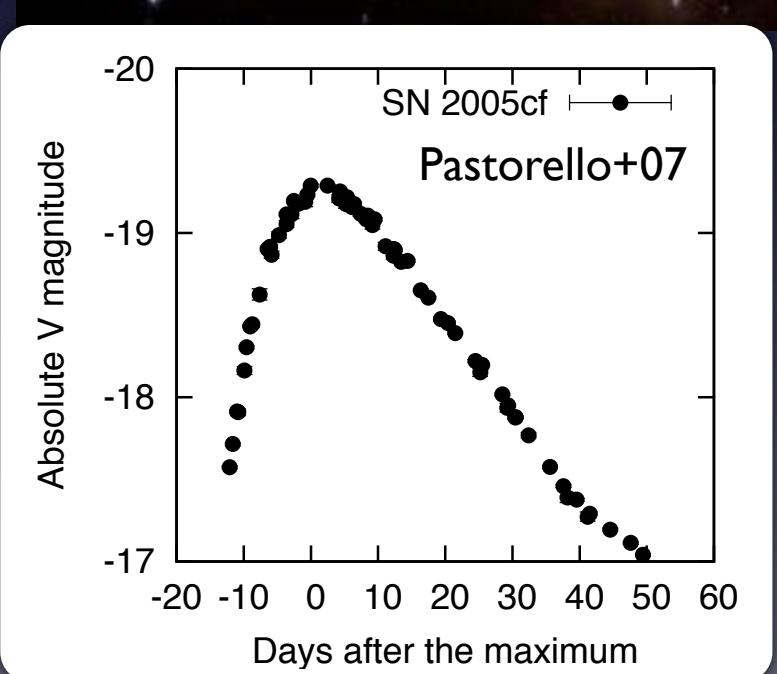
$$L_{\max} = \left(6.45 e^{\frac{-t_r}{8.8\text{d}}} + 1.45 e^{\frac{-t_r}{111.3\text{d}}} \right) \left(\frac{M_{\text{Ni}}}{M_{\odot}} \right) \times 10^{43} \text{ erg s}^{-1}$$

Absolute magnitude $\sim -19 \text{ mag}$

一様性 + 強烈な明るさ



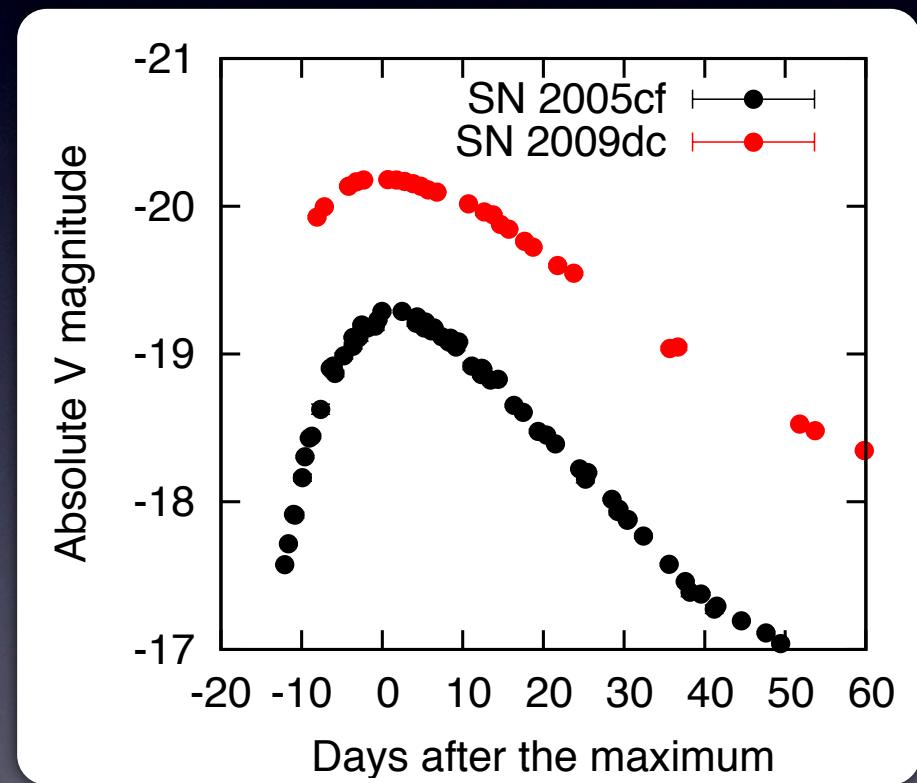
宇宙における距離指標



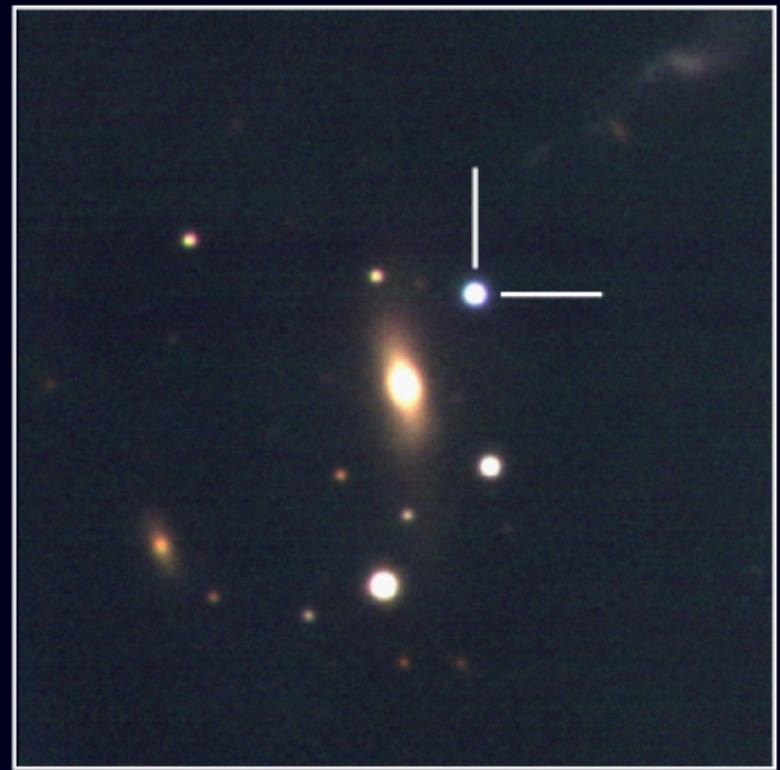
スーパー明るいIa型超新星がいる

- 大問題4：チャンドラセカール限界質量を超えて爆発する？

Yamanaka et al. 2009



→ $M(^{56}\text{Ni}) > 1.2\text{Msun}!!$

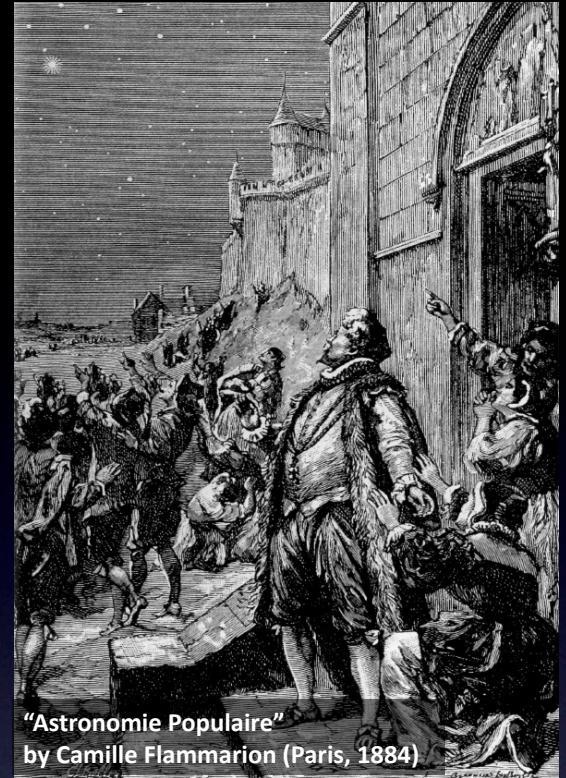
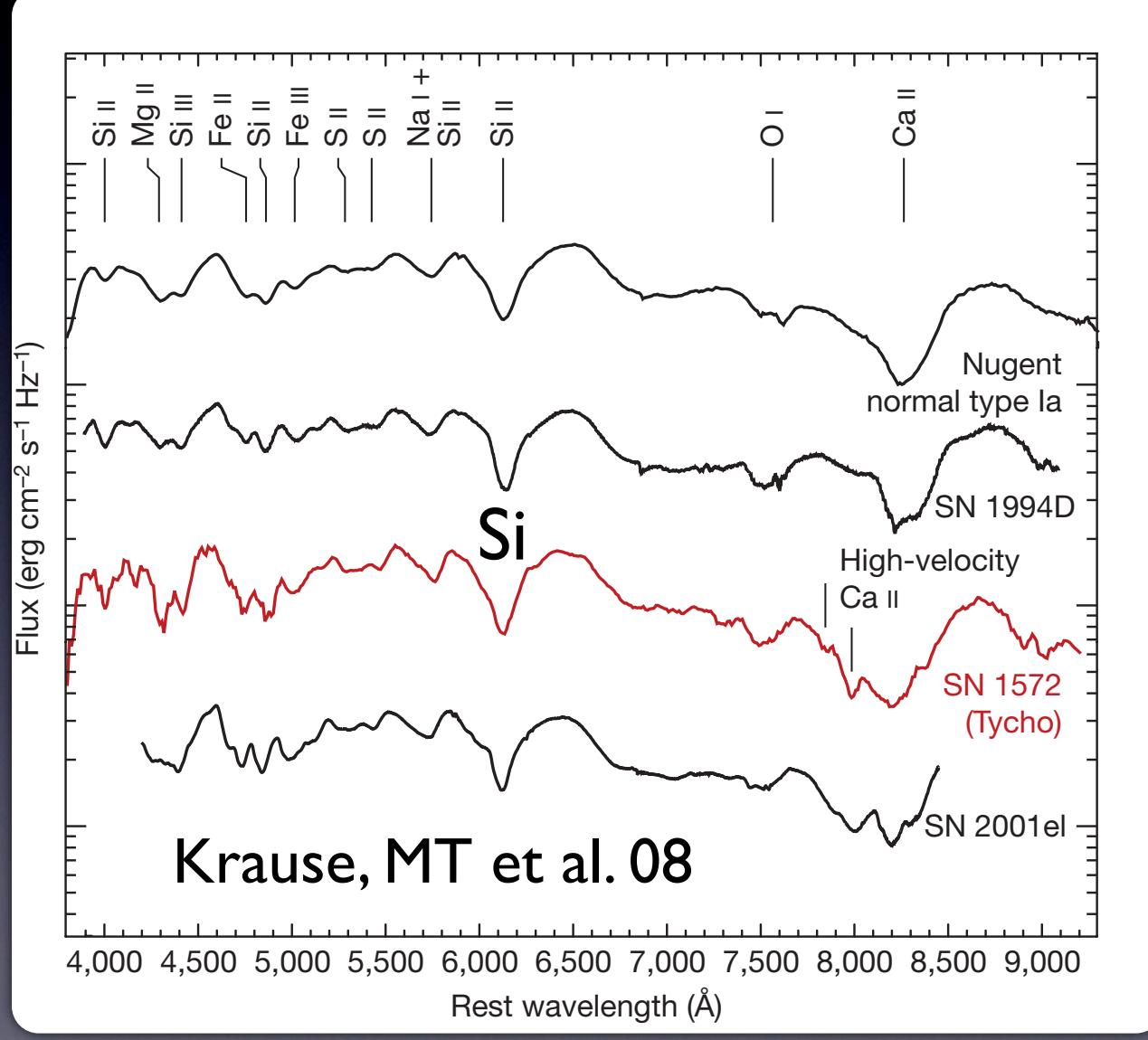


SN 2009dc in UGC 10064
KANATA Telescope/HOWPol (B, V, R)
Copyright © Higashi-Hiroshima Observatory

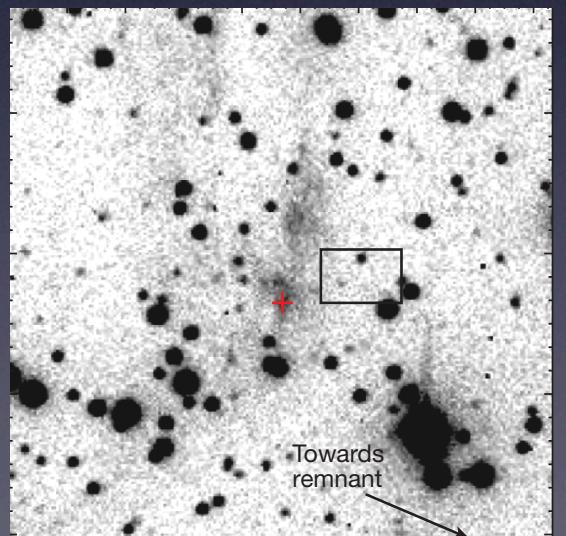
“Light Echo”



Tycho's SN = Type Ia!!



1572



2008

銀河系内の超新星残骸

